

# マリの女性とシアの木

## —シア・バター生産組合による生活改善と女性の地位向上—

香川大学経済学部教授

園部 裕子

### ①シアの木とシア・バター

近年、日本でも、ハンドクリームなどの化粧品に、肌の保湿や保護のため「シア・バター」が使われるようになってきました。実際はもっと以前から、チョコレートなどの原料になる植物油脂の一部としても、使われています。このシア・バターとは、世界でも西～東アフリカの一部地域にのみ生える、「シア」の木の種子から作られる油脂のことです。マリは、シアの種子の生産量において、ナイジェリアに次ぐ第二位（輸出量の第一位はガーナ）と、シアの生育する主要7カ国でも有数の生産国です。

シアは、西アフリカで古くから食用、日用品、医療、呪術用などさまざまな場面において、実、葉、根や幹まで用いられ、人々の生活に根ざしてきました。他方で「女性の木」としても知られ、実・種子の収穫から「バター」と呼ばれる油脂の精製まで、女性だけがかかわるものとされています。

ここでは、このシアと、マリ各地で結成されている、女性たちによるシア・バター生産組合の活動について紹介します。シアとシア・バターについて考えてみれば、現在、シア・バター作りがマリの人々の生活を改善し、女性たちの地位を向上させていることが、よく分かるでしょう。

シア (*Vitellaria Paradoxa*) は、英語で *Shea*、フランス語では *Karité* と呼ばれており、それぞれバンバラ語 *si*、セネガルのウォロフ語 *kaarite* が由来です。シアについての歴史もっとも古い記述は、19世紀に西アフリカを旅したスコットランド人冒険家、ムンゴ・パークや、ヨーロッパ人として初めてトンブクトゥから生還したフランス人、ルネ・カイエらによります。

カイエは、現在のセネガルからマリ、モロッコを旅し、『トンブクトゥへの旅』という旅行記を著し、現地の人々の生活の様子を伝えました<sup>1</sup>。この本は現在でも、この地方を旅するフランス人などの旅行者に好んで読まれています。カイエはこの本の中で、当時の女性たちがシアの種子からどのようにして油脂を作っていたかについても、詳しく記しています。その方法は、現在、マリの女性たちがシア・バターを精製している方法と、ほとんど変わりません。

西から東アフリカに広がるサハラ砂漠の南縁には、地理学的には「サヘル」と呼ばれる半乾燥地帯があります。シアの木の生育地は、このサヘルにほぼ重なる、年間 600

---

<sup>1</sup> Caillé, René, 1996, *Voyage à Tombouctou*, Tome 1 et 2, La Découverte.

～1400 mm程度の雨量のあるところですが、もっとも多く生えているのはマリ南部、ブルキナ・ファソ、ガーナおよびコート・ジボワールの北部にかけてです。マリでは、中部の都市セグー以南に特に多く見られます。南部の州「シカソ Sikasso」は、バンバラ語で「シアの木の家 *sika so*」を意味し、実際シカソ州に入ると、シアの森と呼べるほどの多くのシアが見られます。他方で、北部三州（トンブクトゥ、キダル、ガオ）は雨量が少ないため、生育地にあたりません。

そもそもなぜ世界中でこの地域にしか生えていないのかなど、シアの木には、まだよく分かっていない点が多くあります。また、その性質にも、とても奇妙な特徴があります。まず生育に非常に時間がかかる木で、実が成るまでに約 20 年、個体としての成熟期に達するには 40 年以上もの年月を要します。このような性質に加え、農村部の女性のみが関わってきた木であることから、植林はほとんど行われてきませんでした。現在、見られるシアの木は、畑の中に生えているものも含めて、すべて自然に生えたものを伐採せず、保護してきたものばかりです。実の成り方にも特徴があり、およそ 3 年に 1 度の周期で豊作を迎えます。毎年、豊富に実が成るわけではないので、収穫量は安定しません。

実の大きさは、日本の鶏卵よりも、やや小さいくらい。上述のカイエによると「ホロホロチョウの卵くらい大きい」（ホロホロチョウは、黒に白い斑点のある、鶏より大きめの家禽。農村部で放し飼いにされています）。5 月から 9 月の雨季に成る実は、貴重な食料になります。果肉を除くと、栗のように固い殻に覆われた「堅果（けんか）」があり、さらにその中に「核」（アーモンドのように、薄い種皮に覆われた種子）が入っています。油脂はこの核から精製されます。オリーブなど多くの植物油は常温では液体ですが、シアの油脂は常温で半固形状になるため、「バター」と呼ばれます。

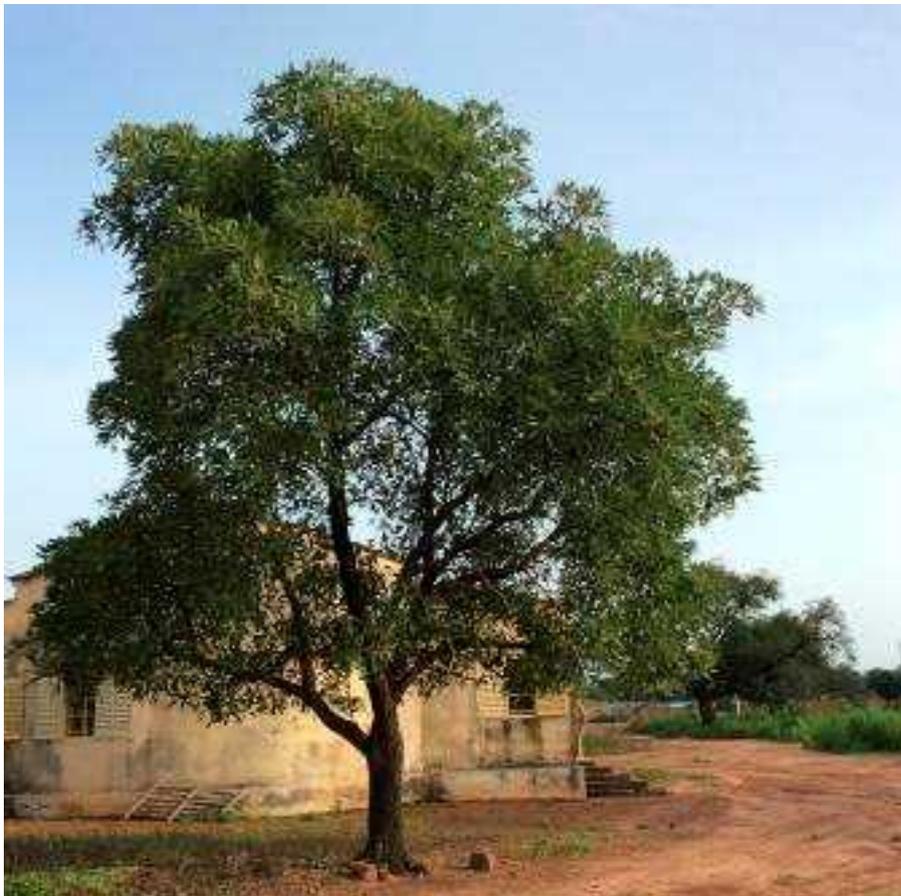
このシア・バターは、調理を始め、灯り、石鹸の材料、土壁の下塗り、船の防水など、さまざまに使われます。トゥアレグ人など、シアの生えない北部地方の人々の食事にも、シア・バターを使わないと作れないものもあります。また、マリでは漁業を生業とするのは主にボゾ人ですが、防水のためにカヌーに塗るので、シア・バターを必要としています。ドゴン人の習慣では、出産後、女性はシアの葉を煎じた湯で体を洗えば、出産に伴う悪運を取り除くことができると言われます。このように、マリをはじめ西アフリカでは、様々な民族がシア・バターを生活に利用しているのです。

マリは人口の 8 割以上が農村で生活しており、300 万人以上の農村女性がシア・バターに関わっていると言われていています。そして、農村女性の収入の 8 割がシア・バターによるとも言われます。マリではシアの生える中・南部に居住する、マンデ系民族のバンバラ人やマリンケ人、セヌフォ人、プール人をはじめ、ほぼすべての民族の女性が、シアの種子からバターを作る方法を伝えています。

このようにシアの木とシア・バターは、マリの人々の生活を支える貴重な資源だと言えます。



シカソ近郊の道路沿いに生えるシアの木



生産組合の敷地に生えるシアの木



シアの幹



シアの実（右上）と堅果